程がくびれる山字状、91・92は弁間に花弁を加えたもの。93は宝珠形、94は桐葉の可能性がある葉文を中心に置く。複線からなる唐草文のなかには、渦文以外に、95は異形の菱形文、99は薙刀状の文様を施こす。中心飾りは、95が珠文を両側に散らした逆三叉文のほかは知られない。周縁は、上部が下部より幾分巾広く、左右両側は極端に広い。

　棰瓦　100は、三巴文の瓦当中央に方孔を穿つ。巴の頭頂は平らである。

　懸魚　図に掲げなかったが、第18号遺構から、瓦製の懸魚らしい破片が出土した。中央に桐文を配し、側辺を直線的に整え、その脇に釘孔を穿つ。

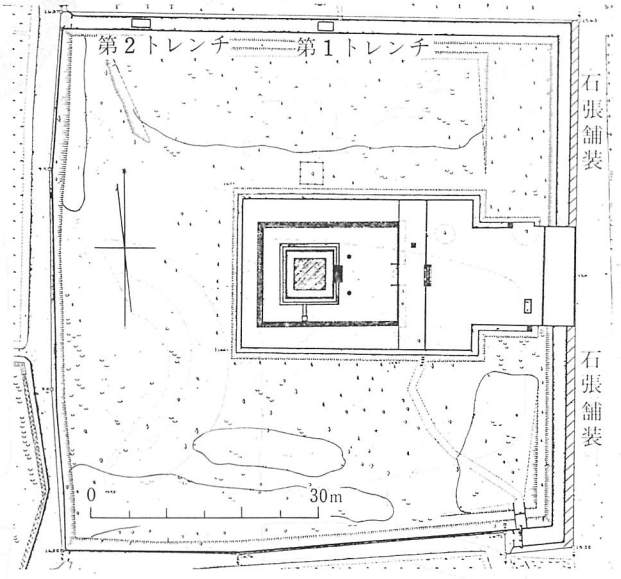
　その他　以上の道具瓦のほかに、通有の丸瓦とは異なる短小な瓦がある。具体的な用法等を知らないが、入組んだ複雑な構造の城郭の屋根を葺いた一種の道具瓦であろう。101は、平面がほぼ台形で、一端の径が他が他端よりも大きい。102は、両端の径にわずかの差があるが、ほぼ筒状でごく短い。なお、全長がわからぬが、行基葺の丸瓦に似た破片が一箇ある。

（笠野　毅）

安楽寿院陵堀浚渫工事区域の調査及び陵前舗装工事箇所の調査

　鳥羽天皇安楽寿院陵の堀の堆積汚泥浚渫工事を行うため、昭和五十八年八月二十三・二十四両日に浚渫区域の事前調査を行い、十月一日から四日まで施工時の立会調査を実施した（第12図）。

　事前調査は、陵の東側から北側の外周にある堀の北側堀内に、間口二メートル、奥行一・五メートルのトレンチ二箇所（第13図1・2）を設定して行った。トレンチ設定に際しては、杉山信三京都市埋蔵文化財研究所長に隣接遺構の所在位置の教示をお願いした。トレンチの土相は、両トレンチ同様で次のようである。



第12図　安楽寿院陵調査箇所の位置　(1/1000)

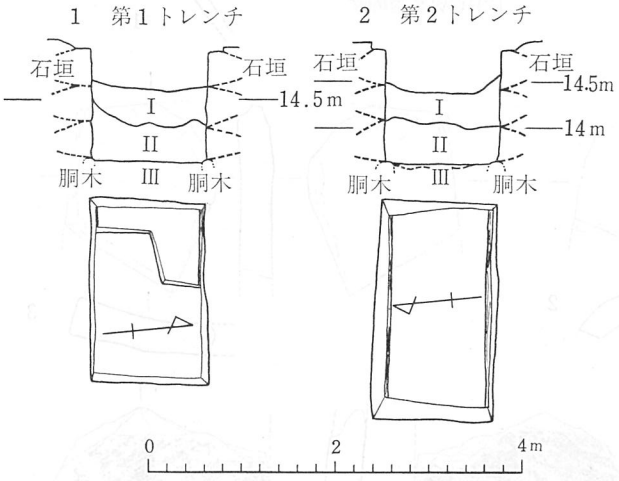
Ⅰ層　表面下厚さ約五〇センチ。腐葉・樹枝・塵芥等の混じた近年の堆積汚泥。暗黒色で臭気を放つ。

Ⅱ層　Ⅰ層下厚さ約三〇センチ。粒状の石・拳大の石が多く混った鉄分を含んだ汚泥状の泥土、遺物を包含する。

Ⅲ層　茶褐色の粒子の細い粘性土、Ⅱ層下二〇センチを発掘。地山と思われる。この層上に堀側壁の基礎胴木を据える。

遺物出土状況は第1トレンチⅡ層内の下方から集中して尾張産の平瓦片六点が出土。内一点は、灰白色の凸面に縄目痕がある。また、小判形をした縦一〇センチの明治時代の子供用の下駄一点がまじっている。第2トレンチではⅡ層内の中央部分で筒瓦片一点のみが出土している。

（南　智次郎）



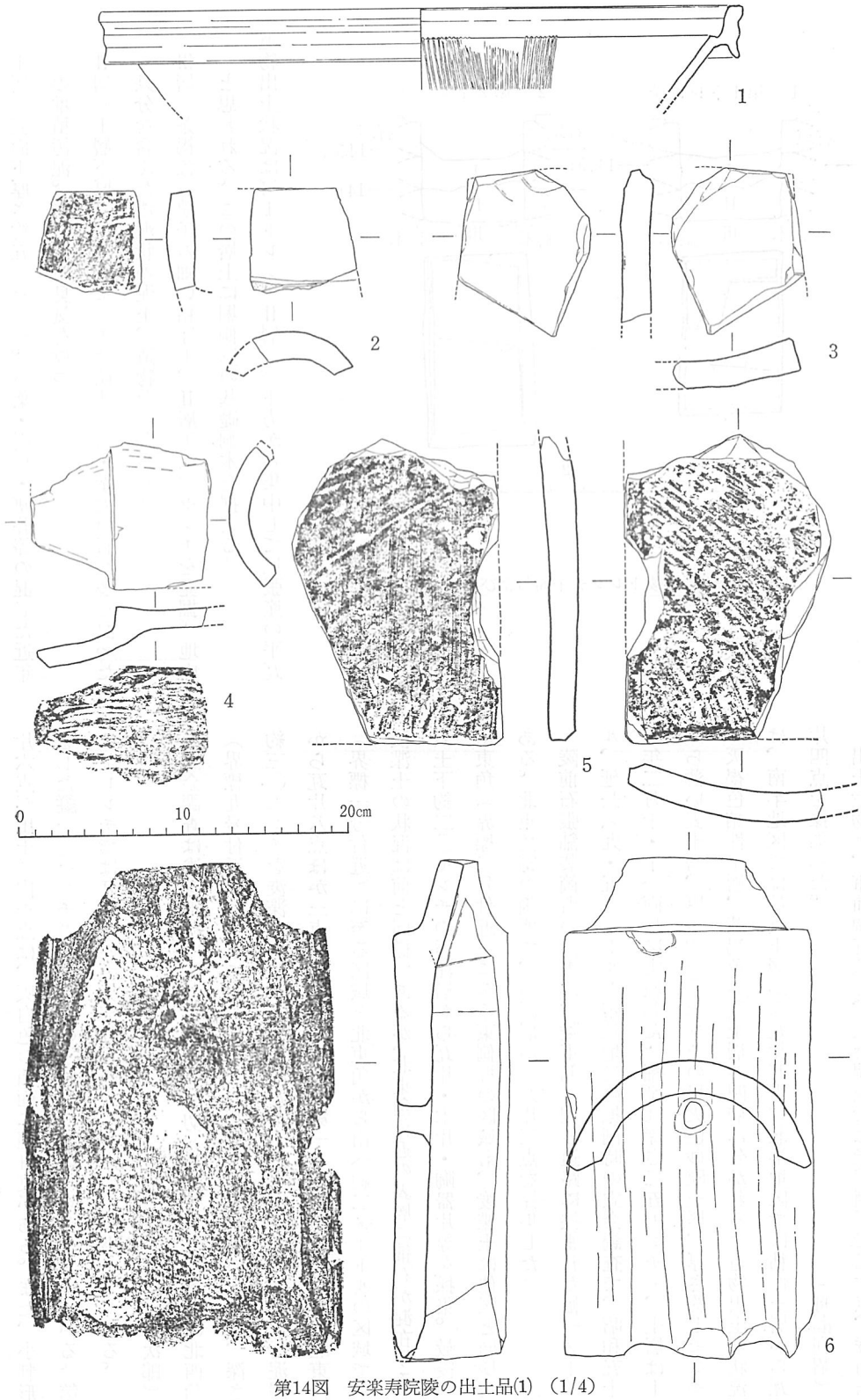
第13図　安楽寿院陵トレンチ平面および断面（1/80）

立会調査は浚渫工程により三区域に区切り実施した。最初は北西角（界標九号付近）より東に向って第一トレンチ箇所までの区域で、深さ約三〇センチを浚渫。浚渫土は表面の腐葉土と黒灰色汚泥層で、汚泥層から瓦片八点ほか三点を採集した。次は第一トレンチ箇所の東、北東角（界標一号付近）に至る区域と北東角から南へ約二メートルの区域で、浚渫土の状況は前と同様であるが、北東角付近の表層に細石が混在する。表土下約二〇センチの汚泥層から瓦片・木片・陶器片等を採集。最後の南東角（界標二号付近）に至る東側堀の区域も、浚渫土は他区と同様である。北東角寄の箇所で、汚泥層から瓦片三点を採集した。

陵前石張舗装箇所の調査は、陵東側の堀と道路に挟まれた幅一メートル、延長六九・五メートルの帯状地帯の掘削時の立会調査で、昭和五十九年二月十・十一両日に実施した。掘削は深さ二五センチで、土層は上から薄い表土層、厚さ約一〇センチの黒灰色砂礫土層、厚さ約七センチの灰褐色粘性土層、茶褐色砂質土層の四層に分かれる。遺物出土の状況は、南半地区では砂礫土層から瓦片四点、北半地区では粘性土層から瓦片四点を採集した。

（舟瀬利昭）

出土遺物は、事前調査八点、立会調査では浚渫箇所で二七点、陵前石



第14図　安楽寿院陵の出土品(1)　(1/4)

張舗装箇所で八点と少く、外構柵設置箇所では出土しなかった。計四三点の遺物のうち大半の三一点が瓦で、他に陶器や近代のものと思われる下駄がある。また瓦は、平安時代のものから近年のものまであり、混在した状態で出土した。

陶器（第14図1）　両面に鉄釉を施した擂鉢の口縁部である。

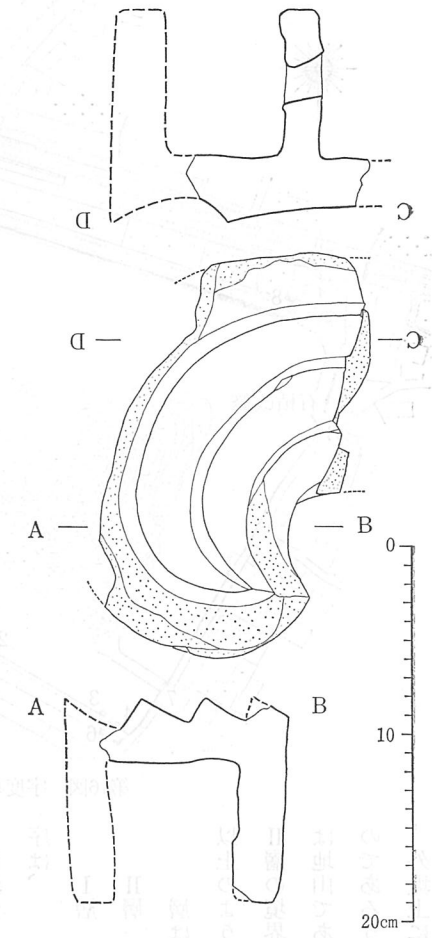
瓦（第14図2～第15図）　鬼瓦・丸瓦・平瓦がある。

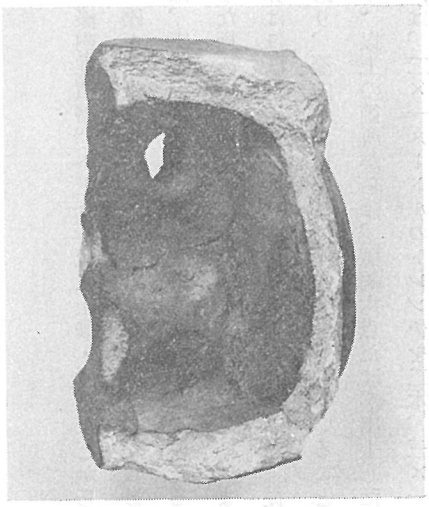
鬼瓦（第15図）　脚部のみ残す。図と逆の上方に巻き込むものかもしれない。黒灰色を呈する燻し瓦で調整は撫でを用いる。二・五×二センチの楕円形を呈する孔が、正面から見えない所に一箇所穿たれている。

丸瓦（2・4・6）　玉縁を有する丸瓦である。いずれも凹面には布目を残す。6の凸面は縦の削り痕が認められる。また、径二センチ弱の釘穴が穿たれている。2は灰白色を呈する尾張産の瓦で、他は燻し瓦である。

平瓦（3・5）　いずれも灰白色を呈する尾張産で、凹面を斜めに削っている。凸面は3が撫でと押え、5が縦の撫でを用いる。3は焼成がよく、一部に灰釉がかかっている。

以上のうち、事前調査による出土品は3～5である。また、1・6・第15図は浚渫箇所、2は陵前石張箇所から出土した。（土生田純之）





第15図　安楽寿院陵の出土品(2)

宇度墓整備工事区域の調査

垂仁天皇皇子五十瓊敷入彦命の宇度墓は、大阪府南端部の淡輪に所在